

橘

花冠合同句集

花冠発行所

カスターニエ

高橋正子（横浜）

竹落葉わが胸中を降るごとし

ベルリン

カスターニエの青き実曇天よりもげば

水に触れ水に映りて蜻蛉飛ぶ

さやけさの中へ起き出し四肢があり

パソコンを消して露散る夜となりぬ

来たぞ来たぞいつもの目白が蜜吸いに

手袋に手を入れ五指を広げみる

阪神大震災

阿部寿子（川西）

冬空に鋭く光る未知の星

行水の盥小さくなり長女三ヶ月

種残し向日葵カサカサ揺れる

誰もがよそよそし私のサングラス

阪神大震災

布団の中凍える五時四十六分

入口開けに走る闇の中寒さ忘れ

風呂恋し毛糸のソックス履いて寝る

山葵植う

安藤智久（伊豆）

吊橋を軋ませ獵師が山に入る

切り出され杉は春野に積み上がる

たんぽぽの花の内より満ちて咲く

山葵植う沢さわさわと暮れゆけり

冬空に高く火を噴く大道芸

どこまでも杉の直立秋の朝

七夕の和紙に触れゆく浴衣の子

かいつぶり

飯島治朗（千葉）

秋の晴影踏みしている登校子

紫陽花を描く児大きくこまこまと

菊日和天神様に晴着の子

枯木立木登りする子丸見えに

脚掻借りお日様近き桃を

かいつぶり潜り水輪を離れ出る

浅草は今も浅草うろこ雲

雪吊り

池田加代子（東京）

風船のひとつが空へ音楽祭

紅梅のりんりと雪降らせつつ

獅子舞の莫塵新しき土汚れ

鰯雲空の広さは海よりも

雪吊りを晴れたる空に成し終えぬ

遠太鼓明るきうちに髪洗う

冬野行くうしろへ轍残しつつ

冬耕す

井上治代（愛媛）

鳴き交わし夏鳥高き青空へ

鳥の声種々聞き分けて冬耕す

中天にたった一つの星涼し

新緑の光さまさま山に満つ

句誌を置く明るい窓辺に青葉風

いっせいに植田となりて風渡る

風の中匂い零して大牡丹

清しき白

祝 恵子（大阪）

がつしりと藤棚作り房あまた
冬瓜の清しき白をサクと切る
わさわさと大きな蕪の一輪車
枯野には空と小鳥と静けさと
春鳥の飛び去り棒の揺れるのみ
もてなさる一つに椀のあさり汁
登校す列の中より咳聞こゆ

寒暁

上島祥子（愛知）

大小の波を重ねて子等泳ぐ
夏河を越えて御岳近く在り
雪解けんまずは水仙咲くあたり
青々と葱のあふるるバスケット
寒暁や米炊き上がり日の始まり
朝顔の強く巻きつく麻の縄
十月や雨音大きくパイプ椅子

オリオン

越前谷勝人（苦小牧）

溶けながら降る淡雪の光かな

薄穂のはらりと解けて風立ちぬ

残菊や妻きつぱりと茎を裁つ

オリオンを袈裟懸けにして星墮ちぬ

天も地も海も凍れる無音かな

流水にアムール河の空の色

雪雲は襟裳岬を離れけり

新緑

岡野亨（松山）

正月に来てかわいさを孫娘

新春のキャンパスに集う友新し

たのしみは家族旅行のお正月

新緑を延びし山並ハイウェイ

人生は短きようにも竹の秋

瀬戸風に蜜柑の黄色照り映える

還暦を共に祝いて天高し

花影

小川和子（埼玉）

風に鳴るなずな花咲く地の起伏

真つ白き一樹と出会うイースター

北へ往く列車に花菜の駅弁も

花影に歓声あがる滑り台

青紫蘇を水に放ちてより刻む

さよならの子らに満月みずいろに

障子貼る今日はそのこと念入りに

初浅間

小口泰興（前橋）

姨捨の山は雪解や露の臺

草の芽や利根の流れの速かりし

風立ちて一際麦の芽のみどり

枯野にもほのかに朱かきものあり

噴煙に朝日差し来て初浅間

朝日浴びわが影冬田越えゆけり

一山の湧き水清し蝶の昼

茄子苗

遠部一恵（広島）

芽吹き初む孫が描きし大き木は

風薫る空を仰いで草むらに

西瓜茄子トマトの苗を土深く

どくだみの白き十字を蔭干しに

井戸替えの水こんこんと湧き透ける

破れ芭蕉風の当たりの強かりき

秋茄子を芥子漬にと手造りで

ゼンマイ時計

甲斐ひさこ（大阪）

先生が先に歌って冬の土手

マスク取り青ふりそそぐ空を見る

春天のどこにも区切りなく暮れり

諸蔓を摘む母ありき終戦日

藤棚の下に吹かれし夏はじめ

つんつんと揺らぎは見せず松の芯

あたたかやゼンマイ時計正午指す

ななかまど

笠間淳子（宇都宮）

春立ちて風に真っ直ぐ向かい合う

三月の朝通勤のまぶしさよ

学び舎を去る日桜芽ふっくらと

黄の勝るポテトサラダは白皿へ

赤き実を空にほっほつななかまど

清流をすくいて紅葉手のひらに

冬陽射し絵を描く子らは包まれて

花のタオル

川名ますみ（川崎）

ものすべて光らせ来たる木の芽風

残る鴨みずから生みし輪の芯に

プールから花のタオルの中に入る

刷かれきてここより翳雲となる

音立てて甲斐全山の芽吹きけり

青空の大きな朝に鳥渡る

夏服にナースの紅の新しき

良夜の影

川本征矢（松山）

人も牛も樹下に坐りてインドの春
牧童処置なし春の沼に水牛入り
二階の窓開けて良夜の影入れる
わが庭に続く麦の芽今年もある
ヨット基地秋潮入れ替わっては流れ
冬の島が夜の潮流の中に灯す
林泉明るくところどころに石抱く雪

月中天

川本良子（松山）

春光を大きくピラミッド三角に切る
月中天潮騒もなし島に寝る
田水ゆたか音を光をあふれさす
小さき故その色のよし唐辛子
シャボン玉の中にしばらく吾住めり
一本の線で描く秋冷の町

インド・ヒンズー大学

マンゴー林大学しづかな春風あり

故郷

久保越子（東京）

春昼のブルドッグにてひそかにも
ねぎぼうず鉢がわたむれ午下り
ドラセナの枯葉パリッと音を出す
暖房の部屋に浮き出て画一枚
新しきハンカチに替え旅に出る
新米を片手に我娘のいる町へ
故郷のたけのここはんありがとう

手袋

久保維希子（東京）

唇に触れる花びら春の風
そよ風にただ身をまかせ蜂光る
夕闇に舞い散る木の葉雪のよう
手袋で感じる北風冬の訪れ
ストーブと喉を潤す甘いみかん
白梅の花びら無数に空向かう
足元の芝生に新芽顔を出す

青山椒

黒谷光子（滋賀）

ゆさゆさと百の牡丹も風のまま

一村の薨を沈め十三夜

糸張って畝まっすぐに大根蒔く

小白鳥みな北向きに漂える

選り終えて夜の灯りに青山椒

比良を背に菜の花明かりひろびろと

花冷えの玻璃戸きしきし拭きあげる

花菜明り

桑本栄太郎（京都）

新樹冷ゆぼつかり青き今朝の空

水色の空の三月摩天楼

明けゆけば花菜明りの車窓かな

菜園の青きバケツや花菜晴れ

ひと風に降るものしきり木の実落つ

木の実降る枝を打つ音水打つ音

すかんぽの穂が揺れ畦に赤く揺れ

秋立ちて

河野 齊（長野）

秋立ちて車中のきものいろいろに

降り続き青田は水が溢れおり

秋空の峰から青が拡がれり

暁の茂みを通る虫の声

八十八夜田の面は黒く光りおり

子供らはコスモス摘みてバケツに生け

前照灯照らして過ぎる樹のりんご

京野菜

河野啓一（大阪）

透きとおる青空を背に秋桜

蒲公英の種ふと浮び空の詩

虞美人草風に揺らせて画布のなか

京野菜摘みしばかりの涼しさに

河鹿鳴くせせらぎの水汲み帰る

色深く熾火残して焚火果つ

はるばると黄砂飛び来て吾が門に

リラ冷え

後藤あゆみ（成田）

さくら山揺るがし一機飛び立てり

まだ青き干草踏めば香の強し

露を煮る緑のままにそのままに

麻の糸選りて編み図を広げたり

手のひらに触るる胎動日永し

リラ冷えのひと日テーブルクロス編む

水張りし田のひろびろと村静か

秋蝉

小西 宏（横浜）

海見える椅子に秋蝉きいている

そら深く晴れたる谷戸の初氷

模様替えし部屋に藺草の匂い立つ

あじさいのゆるき坂行く傘の色

丘の家の薔薇赤々と海に向き

磐梯の雪残したる大裾野

白木蓮咲き初めたれば空広し

白梅

迫田和代（広島）

風ふいて梅の香かおるわが庭も

荒風に逆らう綿毛猫柳

雪解けを待ちし子供の叫び声

春潮と言えば馬関の狭い海

白梅の香りとともに明るさも

はつ冬の沖より汽笛尾をひけり

月の出に口笛次第に遠ざかり

八重桜

塩河寿代（高松）

山すそに日ざしをためし野水仙

夏潮に入江鎮まる船隠し

花菖蒲かすかに水の動きあり

夕風に潮の満ち来る漁師町

八重桜色を沈めて街ふけぬ

どんどの火神馬の上を登りゆく

夏星の光を仰ぎ子の帰郷

辛夷満開

志賀泰次（網走）

息はずむ高台の寺の辛夷満開

草の上にシヤツ無雑作な五月晴れ

灯台の岩陰に入り航涼し

鯛雲の空の広さへ熱気球

佇めば赤とんぼうのわが視野に

摩周湖

霧流れコタンへかかる虹の橋

熊除けの鈴響きあう茸狩り

糸瓜棚

篠木 睦（三重）

糸瓜棚抜けゆく風の色青し

青空を広げるように松手入れ

病む妻の夕餉に添へて菊なます

文机の向きを変えみて虫しぐれ

艇庫みな開かれてあり梅雨晴間

峡どこも水の音して土用の入り

千枚の棚田一気に稲の花

葉桜

渋谷洋介（東京）

北京好天故宮に吾に柳絮降る

真つ青な北を目指して雁ゆける

葉桜の青にしばらく染まりいし

赫々と空引き寄せる凌霄花

のうぜん

青空のかくも深きや鳥渡る

町並みの切れてまあるい秋の海

大いなる冬満月の東天に

瓜刻む

下地 鉄（沖繩）

受け継ぎし俎板ありて瓜刻む

お遍路の鈴はればれと山をゆく

灯り消し良風入れて夏至の居間

コスモスの揺れ合いながら日を惜しみ

風鈴のさそう夜明けの青き風

守宮鳴く人の恋しき夜となり

紫桔梗つぼみの俣を妻に剪る

千歳飴

白髭太郎（千葉）

千歳飴袴の裾も引きずりて

ぴりぴりと辛きおろしで秋刀魚食う

落葉船早瀬にもまれ沈みけり

山頂の夜霧の深さ下界消す

ヒヨつがい波型描き去りにけり

降り敷きていろはもみじの天狗寺

紅葉と色競うごと天狗面

空に浮く

高橋句美子（横浜）

菜の花の黄の集まりて空に浮く

真つ直ぐに噴水立ちて虹生まる

含羞草の葉を拵げては深呼吸

窓開く静かなしずかな星月夜

雪山を見渡してより出発す

白粉花の香りと共に涼しい風

手袋の色いろいろに編んでいく

出初式

高橋秀之（大阪）

鮮やかに仕事始めのはんこかな

大空へ放つ七色出初式

桜舞う天保山に船が入る

堤防のものもの芽踏んで鬼ごっこ

夕焼けの温もり抱いて子ら帰る

店先の蜜柑一盛り崩れ落つ

暗がりです冬帽子脱ぐ通夜の列

猪狩

多田有花（姫路）

青空を透かしてほぐれ楓の芽

田に水の入り初め峰に遅桜

竹林を八十八夜の風渡る

植田はや青々として陽の高き

山小屋を出れば斜めに天の川

澄む秋の空半分には穂高あり

猪狩を外れし犬と出合いけり

島若葉

佃 康水（広島）

船窓に見え来る全山島若葉

広島縮景園

茶摘女の手のさ緑の陽を返す

籠の目にきらつと見えて菜花の黄

包み紙少し濡れいて露の臺

せせらぎの谷のしじまに著莪の花

賑わいの漁港の上の鰯雲

色も香も空も青くて梅漬ける

葛湯吹く

徳毛あさ子（広島）

花吹雪集めて青き燧灘

梅漬けて深き眠りに梅も我も

野の川の青田の中に入りて鳴る

索麵のひかりの束となり乾く

生きしもの海に眠らせ盆の月

水引の朱ひとすじが風の中

葛湯吹くときわが心も透明に

マリーナへ

徳毛淑（東京）

菜の花の一群過ぎて福塩線

ゆつくりと桜並木の駅に着く

紫木蓮の静かに燃える曇り空

蝉時雨の石段抜けてマリーナへ

車窓から盆地の町の雪景色

焼栗の匂いのカバン帰省の旅

幾千の屋根にひとしく雪の降る

空の青

戸原 琴（千葉）

春愁やあご髭があればとなでてみる

サラサラと生きるのが良し星祭る

音涼し水の中にて花を切る

シャボン玉息吹き込まれ生まれしもの

朝市のぶどうの葉にのせぶどう売る

もみじ葉の触れ合う音も降りて来ぬ

雪すべて降らせて戻る空の青

風を待つ

鳩崎良一（愛媛）

しゃぼん玉追いかける子も七色に

ブランコの子が浮き上がり天にある

万緑の中歩むほどに生まれ変わる

こいのぼりの尾ひれつかんで風を待つ

山越えて空色に染まる秋の蝶

朝霧でまつげ濡らして山頂へ向かう

夜明け前の雪の清さよ男児生る

花菖蒲

原 順子（船橋）

碧空に富士白くあり小寒へ

ケーブルの車窓くるみの実の青き

富士から湧水柿田は下萌ゆる

遮断機の降りしを蜻蛉越し行けり

恋すてう記憶はおぼろ桐の花

一筋の葉脈強し花菖蒲

紫陽花まん丸ひと花ずつの個性

柏餅

平田 弘（東京）

朝顔の苗一列に新学期

高々と鳥を呼び込む棕櫚の花

岐阜提灯透かし模様
に灯がともる

白富士の頂望むぶどう棚

木の独楽の色鮮やかに回りだす

透明に包む水仙胸に抱き

梅林を透す日差しが空の色

実石榴

藤田裕子（愛媛）

梅檀の花蔭に入る旅の朝

実石榴の透明に赤くはじけている

桔梗の絵のうちわ静かな風送る

子の寝息軽やかなりし春の宵

春の蒔シャキシャキとして母の味

抜きたての大根ずしりと土の匂い

まんまるい蕾もろとも花菜漬け

夕月夜

藤田洋子（松山）

湯をはじく乳房の張りよ夕月夜

小鳥来る朝よろこびの始まりに

冬木立つその確かなる影を踏む

植田澄みもれなくそよぐ丈となり

遠ざかる風船は今空のもの

子が発ちし八十八夜の月明り

ペダル踏む籠に落葉とフランスパン

木の実独楽

古田けいじ（名古屋）

アンネ・フランク展

咲きかけの黄薔薇とアンネフランクと

木の実独楽歩き始めし子へ廻す

花浮かぶ水門へ春潮上がり来る

露天湯と白樺若葉と青空と

こいのぼり上手い具合に山の風

レタス出荷トラック霧の坂下る

日に焼けし物売りがじる青りんご

春夕焼

堀佐夜子（大阪）

若草に我が両足を立たしめる

鳥凶鑑さがすパソコン春灯に

竹涼し青き日差しの幾筋も

炎天下影短くて車椅子

露草の青い空気へ車椅子

眠りても十六夜の月光胸に

オリオンを傾けさせて冬が来る

雁の列

堀 幹夫（大阪）

乗鞍の雪嶺青くオリオン座

白樺の少し上から星が降り

遠くより親友来る日雁の列

邪気のない声通り過ぎ翳雲

明神池足元からの新穂高

ホッペンの音走りぬけ琵琶湖の秋に

厳冬のそこまで来たり山光る

雪の越後

堀川喜代子（新潟）

日に透きてはなやぐ雪の越後かな

新緑や湖に真向かう美術館

紅色の紐を結びて簾吊り

朧夜の川の広きを渡りるけり

酒蔵や桶干されあり花の下

一斉に駄菓子の店の風車

初夏やテーブルクロスに糊効かせ

若竹

宮地祐子（高知）

背に重き筍ありて谷の風

手袋のやさしき色の五指ひらく

春北斗大きく懸けて山連なる

茎漬のみどり揃えてざくざく切る

軒幅に薪高く積む冬はじめ

若竹伐り空もろともに落ちてくる

すつきりと西瓜の縞の切られあり

大花野

宮本和美（岡山）

牛小屋におおきな注連を飾りけり

水仙の花の黄色に朝が来る

朝採りの茄子軋みあう籠の中

海風をはらみて軽し夏帽子

大花野視界三百六十度

秋冷やポケットに拳しまいけり

木の実降る空の青さとなりにつけり

鴟が来る

宮本松次郎（松山）

雷光の石鎚山より年明けぬ

春一番山のどよめき風に乗る

筧が水吹き出して土を割る

ローカル車五月の窓に綺麗な風

石鎚の高さ戻って梅雨終る

空色の朝顔一番高く咲き

耕してスコップ立てれば鴟が来る

雲の峰

柳原博（今治）

桜咲きみなぎる生をそこに見る

打水の涼しき道を通りけり

雲の峰島の上なる空に立つ

球場にとんぼ飛んだりして野球

鯛雲天守の上にひろがれり

銀杏のたわわに実るオフィス街

摘み取りし大菊我が手にずっしりと

つばめ来る

柳原美知子（今治）

定時制高校

荒星を数えておれば子ら登校

刃の入りてたちまち西瓜の水匂う

二男悠二郎小学四年

連れ帰りし風邪引きの子の機嫌よく

溪流に十指を浸す夏の終わり

雲流る空を降りくる赤とんぼ

つばめ来る瀬戸の海光ひるがえし

桜咲く島へと長き水脈を曳き

薫風

矢野文彦（大阪）

ふり仰ぐ天の深さよ春の雪

車椅子落花を運び戻りけり

薫風や電池換えたる車いす

初風呂や介護の視線全身に

七夕竹に一日華やぐデイの部屋

樟若葉大きな空はそのままに

人見えぬながら春田となって来し

波を泳ぎて

山中啓輔（大阪）

噴水立って音が生まれる朝の池

研ぎ上げし包丁さくりと西瓜切る

太刀魚の太刀を断たれて魚店に

秋蝉のはたと鳴き止み鳴き継がず

紀ノ川の水澄みて子の嫁ぐ朝

棒鱈のせり始まりし冬初め

夕焼けに灯台真白という色に

早良野

松尾節子（福岡）

紅梅のつぼみふくらみ娘発つ

花ふぶきぬけて吾子の校舎あり

うぐいすの声におくられ出勤す

早良野の田に水満ちて安堵せり

露草の露のいのちをおもいけり

はつとする赤さや荒れ地の彼岸花

早良野は子等のふるさと稲みのる

スペインへ

村井紀久子（横浜）

啓蟄の雲はもくもく動きおり

流し雛堰越える時向きを変え

サングラスして憧れのスペインへ

雨上がるトレドの丘に夕虹を

団栗が転がり落ちて空堀へ

堰越える水音強く冬茜

冬深し斧打つ音のすきとおる

あとがき

今年、電子書籍元年と言われ、二月一日には、日本の書籍出版三十一社からなる「日本電子書籍出版社協会」が結成されました。五月二十八日には、アップル社の、電子書籍閲覧が可能な iPad (アイパッド) が日本でも発売されました。花冠発行所では、すでに刊行されている同人諸氏の句集がデジタル化され、パソコンでの無料閲覧が可能な電子書籍がつぎつぎと生まれています。紙の本とは、コンテンツ(内容)が同じでも、また別の新鮮な印象を与えてくれます。本句集『橘』は、これらの電子書籍の中の一冊です。

花冠発行所は、前身の「水煙」の時代から、信之先生がネット事業にいち早く取り組んで、その歳月も十五年になろうとしています。その間に蓄積された、俳句や論文などコンテンツ(内容)は、膨大なものとなっております。ファイルが保存されていますので、書籍化が進めば、世界の人達にも読んでいただける可能性が大きくなります。費用などの制約で書籍化できなかったものが、書籍となって現れ、明るい将来が来る気がします。

花冠発行所では、すでにオンライン版と現実の紙の雑誌を同時発行していますが、電子書籍とネット上のオンライン版とが違うのは、書籍の形態を持つか持たないかということでしょう。書籍の形態というものが、実は、人間の思考の凝縮や集中、また論理性などを持つのに役立つように思えます。「絵本の世界」「本の世界」というように、ある限られた「世界」を持つからと思えます。綴じた本は、それが、「思考の形」となっていると思えます。「本」の魅力は、そこにあると思えます。ネット上で「本」の形、書籍の形態に出会うならば、新鮮な印象を与え、「本」の新しい魅力となります。

花冠の創刊は、昭和五十八年九月のことになりますが、創刊当時の編集を担当しており、このころは、私的にも大変多忙で、思い出の多い時期でした。長女句美子が誕生し、長男の元は三歳で、主人は、学会の理事をしておりました。それ以来、学生や外国から俳句の勉強に来られた方、地元愛媛のかたなど多くの方との交わりがありました。平成十五年に、創刊二十周年の記念事業の一環として、同人誌友一一九名参加の合同句集『橘』を刊行いたしました。昭和五十八年創刊の花冠は、平成八年、ホームページ「インターネット俳句センター」を開設することによって、文字通り日本中から、句友の皆様にご参加いただくことによって、一層の力を得、また新しく発展することができました。合同句集『橘』に掲載の句は、それぞれの方の代表句でもあります。日本の風土から生まれた、個性ゆたかな句です。家族のこと、自身のこと、職場のこと、行事のこと、あるいは突然の災害のことなど、さまざまが詠み込まれています。「よい俳句は、よい生活から」、「明るくて深い現代語による俳句」、「細く長く」という信之先生の教えを実践して参りました。その二十七年の結果が電子書籍の合同句集『橘』と言えます。七年前の紙の句集は、印刷・製本ともに花冠発行所が殆ど自力で完成いたしました。パソコンによる印刷、ドイツ製の簡便な製本機による製本、国際図書番号 (ISBN) もつけて、立派に市場に流通し、検索できる本となりました。今回の電子書籍『橘』も広く世に知られ、世に受け入れられる句集となることを願っています。この句集の電子書籍化は、信之先

生が一手に、楽しみながら引き受けてくださいました。ここに無事電子書籍『橋』が誕生しましたことを信之先生初め、句友の皆様と共に喜びたいと思います。

平成二十二年六月

高橋正子

■俳句ブックのご案内

① 高橋信之第3句集『旅衣』

<http://kakan.info/books/ryoi/>

② 高橋正子第2句集『花冠』

<http://kakan.info/books/kakan/>

③ 平田弘句集『翔ける』

<http://kakan.info/books/kakeru/>

④ 矢野文彦句集『樟』

<http://kakan.info/books/kusu/>

⑤ 河野啓一句集『せせらぎ』

<http://kakan.info/books/seseragi/>

⑥ 藤田裕子句集『春の露』

<http://kakan.info/books/harunofuki/>

⑦ 柳原美知子句集『島の春』

<http://kakan.info/books/sima/>

⑧ 藤田洋子句集『梅ひらく』

<http://kakan.info/books/ume/>

⑨ 俳句入門講座／高橋信之著

http://kakan.info/books/haiku_nyumon/

⑩ 総合俳句論／高橋信之著―多様な俳句への新たな展開を―

http://kakan.info/books/sogo_haikuron/